

## アウトサイダー・アートを巡る旅

橋 本 明

### アウトサイダー・アートを巡る近年の動向

最近、いわゆるアウトサイダー・アート（あるいはアール・ブリュット。以下、必要に応じて、アウトサイダー・アートとのみ表記）への関心が一段と高まっている。この種のアートを定義することは容易ではない。教育・福祉的な視点に立てば、精神障害・知的障害をもつ人たちが制作した「芸術的な」作品となるかもしれない。だが、「アウトサイダー・アート＝障害者アート」という見方はあまりに狭量だろう。芸術の視点に立てば、芸術という既存の枠組みや制度からはみ出した、危険で前衛的なアートがアウトサイダー・アートである。作者が「障害者」であるかどうかは問題にはされない。このあたりの、アウトサイダー・アートの歴史や背景は、本誌の宮地麻梨子氏の論文（「日本におけるアール・ブリュットの展開」）に詳しいのでそちらを参照していただきたい。

ところで、わが国におけるアウトサイダー・アートの歴史は、特異なものとしてされている。兵庫県立美術館学芸員の服部正は、日本の「特殊な事情」をヨーロッパと比較しながら次のように述べている<sup>1)</sup>。

西欧の場合、精神科医が提示する資料に反応し、それをアートの領域とつなげたのは、前衛的なアーティストたちだ。日本には、アウトサイダー・アートと積極的に関係し、その価値を社会に訴えかけるアーティストがほとんど存在しなかった。その結果、積極的に山下清を世に送り出した式場隆三郎の活動だけが突出することになった。その後の美術界は、山下を無視す

るのと同じ手つきで、ほかのアウトサイダー・アートからも目をそらしてきたのだ。

医療機関や福祉施設などで作り手と関わる精神科医やワーカーは、作者本人の人となりを知り、生活環境を知っている。他方アーティストや評論家は、図版や展示会で作品のみを知ることになる。どちらの立場も選択可能だった式場は、前者の立場を選び、作者の生活環境改善に力を尽くした。この前者の立場と、作品に惹かれる後者の立場がバランス良く配分された時に、はじめてアウトサイダー・アートはアートとして社会に知られるようになる。その歴史を、日本はまだ経験していない。

そして、治療や教育という「重い十字架を背負うことになった」<sup>2)</sup>のが、戦後日本のアウトサイダー・アートのあり方だったという。アートが病院や施設での治療や教育の手段として使用される一方、そのような手続をへて出現したアウトサイダー・アートを、美術界はアートと認識せず、敬遠してきたということになるうか。

とはいえ、芸術の側からのアウトサイダー・アートへのアプローチも徐々に浸透してきた。国内でアウトサイダー・アート界をリードしてきたひとつの拠点として、東京の世田谷美術館が挙げられる。当館学芸員の遠藤望によれば<sup>3)</sup>、1986年に開館した世田谷美術館は「設立当初からいわゆる素朴芸術、すなわち正規の美術教育を受けることなく、非専門の作家として創作をしてきた人々に注目し、作品を収集してきた」。というのも、世田谷という場所の「人々が住居をかまえ、日々の暮らしを営む」地域特性に着目して、「その生活

空間の延長にある美術館を目指そうとし、「高度に専門化された至高の存在としての芸術ではなく、だれもが身近に感じ親しみをもって共感できる芸術」が志向されたからである。これも宮地論文で言及されているが、1993年に当館で開催された「パラレル・ヴィジョン—20世紀美術とアウトサイダー・アート」というロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム企画の国際巡回展は、「その後日本において組織されたアウトサイダー・アートの企画展や書物の刊行のひとつの起点」になったという。

ただ、服部によれば、その後の展開は「日本で欧米のアウトサイダー・アートが盛んに紹介されるようになり、日本の美術界がアウトサイダー・アートに積極的に関わるようになってきた結果ではなく、むしろ「障害者に対する人権意識の変化や、障害者の社会参加を促す様々な運動」が盛んになるといった「社会福祉の分野と完全に切り離された文脈で考えることはできない」という<sup>4)</sup>。確かに、2000年前後から、日本人作家によるアウトサイダー・アートが海外で注目された。たとえば、スイス・ローザンヌのアル・ブリュット・コレクション (Collection de l'Art Brut) は、1990年代の終わりにはじめて日本人作品を収蔵した。作品は京都府内の知的障害者更生施設みずのき寮の利用者によるものである<sup>5)</sup>。さらに、2008年にはこのローザンヌの美術館で「日本のアル・ブリュット (Art Brut du Japon)」展が開催されるに至った。それは、「日本の作品がアル・ブリュット・コレクションの資格で、つまり同等の美術作品として問われる」ことを意味していた。だが、この展覧会も滋賀県の社会福祉法人が運営するボーダレス・ミュージアム NO-MA との連携で実現していることを忘れてはならない。やはり、「社会福祉の分野と完全に切り離された文脈」ではないのである。

一方、「パラレル・ヴィジョン」から丸20年を経て、2013年秋に世田谷美術館で「アンリ・ルソーから始まる—素朴派とアウトサイダーズの世界」展が開催された。当美術館の収蔵作品からの

展示のせいか、上記の「NO-MA 系列」でお馴染みの日本人作家の作品は一切なく、世田谷美術館の原点である「素朴芸術」というコンセプトにきわめて忠実である印象を受けた。熊本でカメラ店を営んでいた久永強 (1917-2004) の「シベリア・シリーズ」、アメリカでホームレス生活をしながら85歳から絵を描き始めた Bill Traylor (1854-1947) の作品など、いわゆる「障害」とは無縁のアーティスト群のものが多かった。これが、1980年代以降の日本におけるアウトサイダー・アート論の一つの総括だとすれば、教育・福祉の立場からのアウトサイダー・アートと芸術の立場からのアウトサイダー・アートとの間の溝が、相変わらず埋まっていないことになる。

他方、教育・福祉か芸術かという伝統的な問いではなく、文化論的な視点に立脚した、日本か欧米かという二項対立的な言説も目立ってきた。2012年、オランダ・ハーレムにある精神医学博物館ヘット・ドルハウス (Het Dolhuys) は、上記のボーダレス・ミュージアム NO-MA の協力を得て“Outsider Art from Japan”展を開催した。この博物館は精神医学の歴史だけではなく、アウトサイダー・アートの企画・展示にも力を入れている。展覧会カタログに寄せて、東京国立近代美術館主任研究員の保坂健二郎は、日本における福祉と文化 (芸術) とのポジティブな関係について論じている。保坂は日本国憲法を引き合いに出しながら、条文を見るかぎり「福祉」に比べて「文化」への言及はとても少なく、諸外国に比べてわが国の芸術への関心が乏しさを反映しているように見える。だが、それは逆で、創造的な行為や文化的な資本が、福祉や生活と密接に関わっているからだという。芸術・文化・福祉・生活が混然一体とした状態の中にある「日本のアル・ブリュット (abj: art brut japonais)」を、むしろ肯定的に捉えているようだ<sup>6)</sup>。また、アル・ブリュット研究者である小出由紀子は、上記の服部正との対談で「欧米のコレクターは、作家の国籍などバックグラウンドを気にせず、クールに作品を重視するが、日本では、作家のバックグラウンドを見る

やさしさを感じる」と述べている<sup>7)</sup>。

## アウトサイダー・アートの国際シンポジウム

さて、だいぶ前置きが長くなってしまった。ここからは、私のミュージアム遍歴で得た個人的な体験をもとに、日本にも多大な影響を与えてきた西欧のアウトサイダー・アートの現在を伝えたい。

はじめに、2012年4月26日にベルギーのアントワープにあるギスラン博物館 (Museum Dr. Guislain) で開かれたアウトサイダー・アートの国際シンポジウム “Outsiders on the Map” から紹介する。これはヨーロッパ各地の博物館・美術館関係者、アーティスト、研究者などが集まって、アウトサイダー・アートについて語る催しである。調査目的で直前の3月にベルギーを訪れた際に、このシンポジウムの情報を知った。知り合いのベルギー人も参加するとのことで、急遽ベルギー行きを決めた。参加者は200人あまり。私以外はすべてヨーロッパの国々の人たち。主催者の開会のあいさつで、「多くの国々からの参加者がいます。イギリス、ドイツ、フランス……そして日本からも」との言葉もあった。ヨーロッパ各地で行われている優れたアウトサイダー・アートの実践紹介が中心であった。絵や彫刻を扱うので、Power Point、You Tube、その他の Website など、それぞれにふさわしい発表媒体が使われた。フランスのアール・ブリュットの団体 abcd (art brut connaissance & diffusion) の代表 Barbara Safarova によるプレゼンテーションでは、2012年2月から3月にかけて兵庫県立美術館で開催された「解剖と変容：ブルニー&ゼマーンコヴァー チェコ、アール・ブリュットの巨匠」展への言及があった。彼女はこの展覧会の記念講演会のために来日しており、その記憶も新しかったのだろう<sup>8)</sup>。

会場で売られていた “ON THE MAP Exploring European Outsider Art: A NOTEBOOK”<sup>9)</sup> という本を読めば、今回のシンポジウムのタイトル “Outsiders on the Map” の意味がわかる仕組みになっている。Maria Bach の巻頭言によれば、この本

は2010年にEUの文化プログラムから資金援助を受けて行われた “Outsider Art Past Forward” という2年間プロジェクトの成果である。背景には、ヨーロッパ各国の関係機関・関係者が連携・協力して、アウトサイダー・アート活動を活性化させようという意図がある。そのイニシアティブをとったのが、上記の Maria Bach が所属しているデンマークの GAIA Museum Outsider Art である。ここで、2008年にヨーロッパ各国の関係者が集まって国際会議が開かれた。引き続き翌2009年には、アントワープのギスラン博物館で会議が行われ、この時に European Outsider Art Association (EOA) が組織されたという。

この本の裏表紙にはヨーロッパの地図が折り込んであり、その地図上に60カ所あまりの数字入りのマルが打たれている。アウトサイダー・アートを展示している博物館、美術館、ギャラリーを示す。分布は、オーストリア、ベルギー、クロアチア、チェコ、デンマーク、エストニア、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、アイスランド、アイルランド、イタリア、ラトヴィア、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ポルトガル、ロシア、セルビア、スロバキア、スペイン、スウェーデン、スイス、トルコ、イギリスに広がっている。以下では、これらの中から、私が実際に訪れたところをいくつか紹介したい。

## オーストリアのグギング

既に述べた世田谷美術館の「アンリ・ルソーから始まる—素朴派とアウトサイダーズの世界」展で、「グギングの画家たち」の一連の作品も展示されていた。グギング (Gugging) とは、オーストリア・ウィーンの郊外にある地名である。1885年、当地に州立の精神病院が建てられたが、いまではアウトサイダー・アートのギャラリーおよび「芸術家の家 (Haus der Künstler)」があることで有名である。とくに後者を1981年に設立したが、この精神病院の勤務医を長く務めた Leo Navratil (1921–2006) である。彼はすでに1950年



図1 「芸術家の家」  
(2007年6月27日、著者撮影)

代から患者の画才を見出し、その作品をウィーンで展示してきた。「芸術家の家」は患者が住み込んで、作品を制作するいわば共同住居である。ここから、Oswald Tschirtner, August Walla, Johann Hauser といった美術界の世界的なスターが輩出した<sup>10)</sup>。世田谷美術館は彼らの作品も収蔵している。

私がグギングを訪れたのは2007年6月だった。オーストリアの精神病院史研究のためにウィーンに滞在した折に、当地の研究者からグギングの噂を聞いたのである。当時はアウトサイダー・アートに関する知識もなかったが、「芸術家の家」の壁一面にぎっしりと描かれた極彩色の絵や文字がとても印象に残った(図1)。それが、August Wallaのものだとわかったのは、随分時間が経ってからである。さらに、「芸術家の家」とは少し離れた場所にあるギャラリーも訪れた。そこでは、Oswald Tschirtnerによる、頭と足しかない、簡潔な線だけで描かれた細長い人物像が目についた。Wallaのやや幼児じみた、空間を色や線で埋めつくさないではいられない過剰さに比べて、Tschirtnerのミニマリズムはモダン・アートその

ものだと思った。グギングで最初にアウトサイダー・アートに向き合ったときの私の感想はこんなものである。ちなみに August Walla (1936–2001) は、グギングに近くクロスターノイブルクで生まれた。幼くして父を亡くし、母と祖母に育てられた。16歳の時に自殺および自宅放火の懸念から精神病院入院となる。退院後は、母が彼の面倒を見ていた。グギングの精神病院に入院したのは1970年で、1986年から「芸術家の家」の住人となった<sup>11)</sup>。一方、Oswald Tschirtner (1920–2007) はウィーン近郊で生まれた。早くから神学を志していたが、第二次世界大戦ではドイツ軍としてスターリングラード攻防戦に参加した。故国にもどり精神病院に入院。のちにグギングに転院し、「芸術家の家」の住人となった<sup>12)</sup>。

## ベルギーのギスラン博物館

上記の国際シンポジウムの会場でもあったベルギーのアントワープにあるギスラン博物館は、精神医学博物館としては世界でもっとも充実したコレクションを誇っているのではないかと。この博物館の前身は1857年に完成した精神病院で、初代院長の Joseph Guislain にちなんで命名された。現在、ギスラン精神医学センター (Psychiatrisch Centrum Dr. Guislain) となっている敷地の一角に、病院創立当時の建物を使って、1986年に博物館が開設された。

私が初めてこの博物館を訪れたのは、2000年5月。ちょうどこの時期、ゲールで行われた精神科のファミリーケアの国際会議に出席するためベルギーに滞在中で、アントワープにも立ち寄った。それよりさらに数年以前に、ゲールの精神病院のアーキビストからこの博物館の存在を聞いており、いつか行ってみたいと思っていたのである。2000年以降、何度かギスラン博物館に足を運んだが、展示の内容や方法はみるみる充実してきた感がある。現在の博物館の展示は、大きく3部門に分けられる。第一部門が常設展示である。かつての拘束具や近代的な電気治療装置など、精神医学の博



図2 Willem van Genk の作品  
(2012年3月11日、著者撮影)

物館としての基本的な展示といえよう。第二部門は企画展示で、この博物館は特に力を入れているようである。およそ数カ月ごとに新しくなる企画展示は、集客力という点にかなりの意識が向けられているためか、精神医学的な主題を広く捉えている。たとえば、私が2012年に当館を訪れた時に開催されていた「危険な若者：危険にさらされる子ども、危険な存在としての子ども（Gevaarlijk jong: Kind in gevaar, kind als gevaar）」展は、グローバルに進行する青少年の社会的・精神的な危機状況を、絵画、写真、映像などさまざまなメディアを通して問題提起することを意図した興味深いものだった。そして、第三部門がアウトサイダー・アートである。

コレクションからアウトサイダー・アーティストとして著名な Willem van Genk (1927–2005) を見ておきたい。オランダに生まれ、5歳の時、母を亡くす。学校には馴染めず、知恵遅れとして扱われていたらしい。第二次世界大戦時の体験が作品のモチーフに強い影響を与えている。彼にとって、ゲシュタポ（ナチス・ドイツの国家秘密警察）は恐ろしく邪悪なものであると同時に、無敵の力を持つ魅惑的な存在でもあり、しばしばゲシュタポの黒いコートを権力の象徴として描いている。彼は鉄道やバスなどの交通機関にも興味を持っていて、さまざまな材料をリサイクルして模型を作っており、「ステーションの王様」という異

名も持つ。彼曰く、自分の作るバスは街のネットワークを支配していると<sup>13)</sup>。圧倒的な物の存在感を示しているというか、悪く言えばゴミの塊のようなバスの模型も、ギスラン博物館の貴重なコレクションを構成している（図2）。

## オランダのヘット・ドルハウス

ヘット・ドルハウスは、アムステルダム近郊のハーレムにある精神医学博物館である。“Dolhuys”とはさしずめ「狂人の家（癲狂院）」といった意味になる。もともとの施設は、らい病・ペスト患者の収容施設として1320年に創設されたが、16世紀ごろに精神病患者の施設へと転換されたという。現在は病院としては機能しておらず、かつての建物を使って2005年から博物館がオープンした（図3）。展示内容はオランダ語圏の精神医学史が中心だが、西欧の精神医学史全般もカバーしている。かつての独房（監置室／保護室）も部分的に残されている。

この博物館はアウトサイダー・アートの展示にも力を入れている。既に述べたように、2012年の4月から9月にかけて、ここで“Outsider Art from Japan”展が開催された。展示会の現地（オランダ）語タイトルは“Verborgen schoonheid uit Japan（日本の隠された美）”である。展示会のカタログが強調するのは、46人のアーティストの



図3 ヘット・ドルハウス  
(2012年3月8日、著者撮影)

作品だけではなく彼らの人となりがわかる略歴も掲載したことである。それというのも、日本ではこうした人々はしばしば施設で暮らし、「ノーマルな」社会から排除されているので、作品が作られた日常生活や環境もあわせて紹介する必要があるからだという<sup>14)</sup>。上で引用した小出由紀子の「日本では、作家のバックグラウンドを見るやさしさを感じる」に沿って考えれば、その「日本的」な手法がオランダで実践されたことになる。だが、日本であろうが西欧であろうが、アート全般にわたって、作品への関心は同時に作者への関心でもあることは当然ではなからうか。「欧米のコレクターは、作家の国籍などバックグラウンドを気にせず、クールに作品を重視する」といい、「日本の隠された美」といい、強烈なオリエンタリズムを嗅ぎとるのは私だけではあるまい。

2013年7月にアムステルダムで学会があり、その合間に同じパネルで発表する日本人たちとヘット・ドルハウスを訪れた。今度は、“*Verborgen schoonheid uit Rusland* (ロシアの隠された美)”展と銘打って、ロシアのアウトサイダー・アートを紹介していた。批判的な見方をすれば、そもそもアウトサイダー・アートという現象がめざすところは、西欧が自らの域内のアウトサイダー・アートという「金鉱」をここ数十年でほぼ掘りつくし、エキゾチック、加えてアウトサイダーという二重に「隠された」非西欧アートをいち早く発掘し、評価を与え、そのアート市場をグローバルに展開し、拡大させるという新手の「帝国主義」なのか、などと想像したりする。

## スイスのローザンヌとベルン

スイスはアウトサイダー・アートの歴史に重要な役割を果たした。とりわけ、アール・ブリュットの提唱者 Jean Dubuffet (1901-1985) が、1976年に彼のコレクションをローザンヌ市に寄贈したことに始まるアール・ブリュット・コレクションは、アウトサイダー・アートの聖地であると同時に権威とも言うべき場所かもしれない。

2013年3月、スイスを訪れた。科学研究費による「精神医療史資料の保存と利用に関する研究」の一環として、ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションも調査対象にしていた。ローザンヌといえば、国際オリンピック委員会 (IOC) の本部がある。中央駅から美術館までは、山あり谷あり、振り返れば湖 (レマン湖) ありと、実に風光明媚な街である。谷にかかる橋 (Pont Chauderon) を渡り、道をまっすぐ、坂を上って、つきあたりを左にまがると、めざすコレクション (美術館) はあった。巨大な建物を想像していたが、意外とこじんまりしていた。国際的に知名度が高い美術館だけあって、コレクションは確かに充実しているという印象。既に述べたように、日本人の作品の収蔵も多く、そのいくつかが展示されていた。西欧系の作品を見慣れた目には新鮮な印象を与えるに違いない。沖縄で知的障害者の作業所に通っているという、「漢字中毒」の喜舎場盛也 (1979-) の作品が代表例かもしれない。近くの飛行場で貰い受けた使用済み航空管制記録紙を、新聞活字大の漢字で埋めつくした作品は、とりわけ異彩を放っていた<sup>15)</sup>。

アウトサイダー・アートに関して、スイスでもう一カ所行きたい場所があった。ベルンの精神医学博物館 (Psychiatrie-Museum Bern) である。開館時間は水曜から金曜の午後2時から5時まで、と限られている。午前中、ベルン美術館 (Kunstmuseum Bern) で過ごしたあと、中央駅から一駅の Bern Wankdorf まで行く。都市郊外のそっけない駅である。日本でプリントしてきた頼りない地図を片手に、ずんずん歩いていくと、かなり田舎の雰囲気になってきた。精神医学博物館があるのは、ヴァルダウの一角。かつて“*Irren-Heil und Pflgeanstalt Waldau* (ヴァルダウ狂人治療・療養施設)”と呼ばれた精神病院の略称である。現在も病院は継続している。病院の入り口を通り過ぎて、少し進むと博物館の看板があった。看板に描かれた人物こそ、Adolf Wölfli (1864-1930) である (図4)。この病院に入院していた Wölfli の画才を見出したのが、同じくこの病院の医師 Walter Morgenthaler



図4 ベルン精神医学博物館の看板  
(2013年3月14日、著者撮影)

(1882-1965)であった。Wölfli は、アール・ブリュットという言葉が作られる以前に活躍した、もっとも代表的なアウトサイダー・アーティストと位置づけられている。精神医学博物館の展示品として拘束具関係が名につく。Wölfli の関連展示もあるが、彼の作品の多くは上記のベルン美術館に収蔵されている<sup>16)</sup>。

## おわりに——ベルギー・ゲールとヤン・フート

これまで述べてきたのは、“ON THE MAP Exploring European Outsider Art: A NOTEBOOK”でも扱われている、アウトサイダー・アートのいわばメイン・ストリームを巡る旅であった。だが、そのような一部の拠点だけが活躍しているわけではない。西欧におけるアウトサイダー・アートのすそ野はとても広い。

たとえば、私が長年研究対象にしてきたベルギーのゲールは、中世の巡礼地に端を発する精神障害者の家族的看護の街として国内外で知られてきたが、近年ここでもアウトサイダー・アートにはかなり力を入れている。2012年3月にゲールを訪れた際、19世紀に後半に建てられた精神病院(現在は、ゲール公立精神医療ケア・センター、OPZ: Openbaar Psychiatrisch Zorgcentrum Geel)の敷地内にある「芸術の家 (Kunsthuis)」に立ち寄った。ここでもアウトサイダー・アートの作品が

生み出されている。責任者の話によれば、ここではアート・セラピーをやっているのではない、結果としてセラピーになっているのかもしれないが、むしろアートを通して患者の世界を広げ、患者の可能性を引き出すことに主眼がある、という。ただ、才能のある患者はごく一部で、多くは普通に絵を描いたり、造形作品を作ったりしているのみ。定期的に美術のインストラクターが来ているが、指導などまったく意に介さず、まさにアウトサイダーの真髄といった感じで、自分の内面からのインスピレーションだけで作品をつくる患者もいる。もちろん作品は売られている。売れた額の半分を制作者である患者が、半分を「芸術の家」が受け取る仕組みである。売った額で「芸術の家」のランニングコスト(絵の具など購入費)は賄えているという。国際的な展覧会に出品される作品も出しているというのだから、レベルは高いようだ。

ところで、「芸術の家」の建物はかつて病院の医師住居として使われており、ここで精神科医の父親と子ども時代を過ごしたのが Jan Hoet (1936-) だった。Jan Hoet (ヤン・フート) といえば、ドイツのカッセルで定期的に開催される現代美術の祭典ドクメンタ (documenta) の総監督を務めたことなどでも知られる、世界的に著名なキュレーターである。つい最近、2013年9月から2014年1月にかけて、彼がキュレーターをつとめた展覧会“Middle Gate Geel '13”がゲールの4会場(OPZ敷地内の「芸術の家」も含む)で開かれた。この展覧会のテーマは、神話・精神医学・芸術である。中世の聖ディンブナ伝説、近現代の精神医学、そしてゲールの歴史を基盤にしなが、アウトサイダーおよびインサイダーによる作品を広く紹介している<sup>17)</sup>。彼の中では、治療・教育・福祉と芸術とは自然に融合しているように見える。気鋭のキュレーターとして一見完全に芸術の側にいながら、ゲールの精神病院の中で暮らしていたという生育環境が患者／アウトサイダーへと向かわせるのだろう。彼は早くも1986年にゲント現代美術館 (Stedelijk Museum voor Actuele

Kunst) で、精神医学と芸術とを結びつける“Open Mind”展を企画している。今回のゲールでの展覧会は、彼が同じ問題意識を持ち続けていることを示している<sup>18)</sup>。Jan Hoet にとって、教育・福祉か芸術かというアウトサイダー・アートのあり方をめぐる伝統的な問いは、無意味な問いかもしれない。

## 注

- 1) 服部正『アウトサイダー・アート』光文社新書 (2003年), p.109.
- 2) 服部正, 同上書, p.104.
- 3) 遠藤望「アンリ・ルソーから始まる一世田谷美術館の素朴派およびアウトサイダー・アートのコレクションについて」『世田谷美術館コレクション選集: アンリ・ルソーから始まる一素朴派とアウトサイダーズの世界』世田谷美術館 (2013年), pp. 4-7.
- 4) 服部正「日本のアウトサイダー・アートをめぐる特殊な事情」『日本のアール・ブリュット』ローザンヌ アール・ブリュット・コレクション「日本」展覧会カタログ (2008年), pp. 21-26.
- 5) 服部正, 前掲書 (2003年), pp. 117-121.
- 6) Hosaka, K., 'The possibilities of Japanese Art Brut (abj)', in Het Dolhuys, *Outsider Art from Japan*. (Zwolle: WBooks, 2012), pp. 5-7.
- 7) 兵庫県立美術館の「解剖と変容: プルニー&ゼマーン コヴァー チェコ、アール・ブリュットの巨匠」展のホームページ (<http://www.artm.pref.hyogo.jp/diary/t1202/>) を参照。
- 8) 上記の兵庫県立美術館のホームページ。
- 9) Museum Dr. Guislain, *ON THE MAP Exploring European Outsider Art: A NOTEBOOK* (Ghent, 2012).
- 10) Brüggemann, R. und G. Schmid-Krebs, *Verortungen der Seele* (Frankfurt am Main: Mabuse-Verlag, 2007), pp. 152-154.
- 11) <http://www.artbrut.ch/en/21004/1033/walla--august>
- 12) <http://www.artbrut.ch/en/21004/1031/tschirtner--oswald>
- 13) <http://www.museumdrguislain.be/en/collectie/outsiderkunst/70-van-genk>
- 14) Het Dolhuys, *Outsider Art from Japan*. (Zwolle: WBooks, 2012).
- 15) Collection de l'Art Brut, *Art Brut du Japon* (Lausanne, 2008).
- 16) Brüggemann, R. und G. Schmid-Krebs, pp. 156-157.
- 17) <http://www.geel.be/activiteitendetail.aspx?id=4454>
- 18) Bekkers, L., *Jan Hoet tussen kunst en psychiatrie*. <http://www.knack.be/nieuws/belgie/jan-hoet-tussen-kunst-en-psychiatrie/article-opinion-110907.html>